

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24790500

研究課題名(和文)リフレクションによる模擬患者養成プログラムに関する研究

研究課題名(英文)Study on the simulated patient training program based on a reflection

研究代表者

高橋 洋一(Takahashi, Yoichi)

鳥取大学・医学部・助教

研究者番号：40594271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年医療コミュニケーション教育に導入が進められている模擬患者(SP)の養成プログラムの構築・提案に向け、SPが患者役として上達していくのを支援するための方法としてリフレクション(自己の経験に対する振り返り・内省)に注目することで実施した。医学生とSPによる模擬医療面接について、E.ゴフマンのドラマトゥルギー(舞台論)の観点や会話分析の手法から、SPの効果的なリフレクションにつながる両者の相互行為の特性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In recent years, many simulated patients have been introduced to the practice education of medical interviews. This study focuses on the reflection of self-experience to propose a simulated patient training program. From the viewpoints of conversation analysis (CA) and dramaturgy, the characteristics of the interaction are revealed between medical students and simulated patients in the simulated medical interviews for the effective reflections of simulated patients.

研究分野：医学教育学

キーワード：模擬患者(SP)養成 医療コミュニケーション教育 リフレクション 会話分析 ドラマトゥルギー

1. 研究開始当初の背景

近年、医学生が患者との医療コミュニケーションについて、効果的な学習やトレーニングを行えるよう、面接実習への模擬患者(SP)の導入が進められている。研究開始当初の時点で、医学教育に広く模擬患者を導入することが求められていたため、各大学医学部や医科大学では、地域住民から模擬患者を募集した上で、学内で養成・運営するというケースが増加していた。鳥取大学医学部でも、研究代表者が中心となって、学内での模擬患者養成に着手、キャンパスの位置する鳥取県米子市を中心に模擬患者を募集し、「米子模擬患者の会」を発足、医療面接実習への導入を中心に、定期的な会合を実施するなど活動を行ってきた。

SP参加型の医療コミュニケーションの授業をめぐることは、医学生のコミュニケーションスキルの習得やその評価については研究成果が蓄積されてきていた。しかし、その一方で、学内養成の模擬患者がどのくらい習熟しているのかという、模擬患者の患者役としてのスキルの観点からは十分な研究がなされてきていなかった。そのため、学内でSP養成を実施している大学では、それぞれ独自のプログラムが設定されているが、模擬患者として実際に活動するなかでの自身の実践や経験についてどのくらい習熟できているのかの評価や、それをもとにした効果的な学習方法について、十分な検討がなされていなかった。しかし、模擬医療面接において事前に作成されたシナリオの設定に沿って患者役を演じることができているか、面接後の医学生へのフィードバックが効果的なものであるかなど、模擬患者に求められる役割は幅広く、またそれらに十分に習熟するためには、模擬患者としての実際の活動や経験についての評価が組み込まれた、より体系化された養成プログラムが必要であると考えた。

そこで、本研究課題では、鳥取大学において地域住民からなる模擬患者の養成を行うと同時に、模擬患者がスムーズに医学教育に参画することで高い教育効果を引き出せるよう、また今後さらに必要とされる領域横断的なより高度なコミュニケーション教育への協力が得られるよう、模擬患者の実際の活動をベースとした養成プログラムの開発と検証に向けた研究の着想を得るに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで十分に注目が向けてこられなかった、医療面接実習における個々の模擬患者の実際の活動や経験についての評価を組み入れることで、模擬患者の活動に立脚した養成プログラムを構築、提案することである。

医療面接実習における模擬患者の活動としては、医学生との模擬医療面接(ロールプレイ)において患者役を演じること、またロールプレイ後に医学生に面接についてのフ

ィードバックを行うことが中心となる。本研究課題では、これら模擬患者の活動について評価するために、「リフレクション(自己の経験に対する振り返り・内省)」の手法に注目する。従来のSP養成プログラムにおいては、模擬医療面接実習で求められる患者の役作りや、ロールプレイ後に医学生に対するフィードバック方法が、実習に先立ってあらかじめ提示され、模擬患者は学生との実習に参加する前にそれに沿うかたちでトレーニングを受けた上で、模擬医療面接に参加するというのが一般的であった。

これに対して、「リフレクション」は、自らが実際に経験したことについて振り返り、内省をしたことを元手として、さらに経験を積んでいくという、いわば自らの経験を、内省をきっかけに重層的に再構築していくプロセスをとる自己教育、自己評価の方法のひとつであると考えられる。模擬患者による自身の経験のリフレクションを模擬患者養成プログラムの中心的な方法とすることで、模擬患者が医学生とのロールプレイやその後のフィードバックに参画するだけでなく、模擬患者としての自らの実践や経験を振り返ることを通じて、模擬患者としてより効果的に習熟することにつながると期待される。

そこで、本研究課題では、(1)「リフレクション」について、理論・実証の双方から研究を遂行することで、模擬患者がより効果的なリフレクション、すなわち模擬患者としての経験の重層的な再構築を導くような自己評価を行うのに求められる主点を明らかにすると同時に、(2)SP養成プログラムの主軸となる方法として、リフレクションを導入することによる効果や、実施にかかる課題についても検証する。

3. 研究の方法

本研究課題では、SP養成プログラムを構築するにあたって、その養成方法として、模擬患者によるリフレクションに注目する。より効果的なリフレクションに何が求められるか、またそのプログラム実施にかかる課題について検証するために、模擬医療面接において、模擬患者という「役を演じる」という経験や、その経験を振り返ってのフィードバックといった模擬医療面接に特有のプロセスについてその特徴を明らかにすることが重要となる。

その方法として、本研究課題では、まず、医学生と模擬患者による模擬医療面接実習のセッションをビデオカメラで録画して、映像記録として蓄積していった。模擬患者が自らの参加した模擬面接セッションのリフレクションを行う素材として活用するとともに、面接実習への医学生と模擬患者による相互作用について、理論・実証研究を実施した。理論研究としては、模擬医療面接の場面をE.ゴフマンによって提唱されたドラマツルギー(舞台論)の観点から分析する。ドラ

マトゥルギーはリフレクションの思想史的系譜のひとつとされ、様々な日常的な場面を舞台とみなして分析することで、人々の行動のあり方をその原因からではなく、舞台上の相互作用のなかから解読しようとするものである。また、実証研究としては、社会学における会話分析の手法を用いる。これにより、医学生と模擬患者による相互行為を徹視的に分析することで、両者の相互行為を成立させているより深層の実践について分析する。

4. 研究成果

模擬患者という「役を演じる」という経験についてリフレクションを行うという、模擬面接実習に特有のプロセスに関して明らかにすることで、以下の研究成果を得ることができた。

(1) 研究期間を通じて、SPが自らの参加した医療面接実習の映像記録について、患者役の演技方や学生へのフィードバックについてのリフレクションを、パイロットケースも含めて随時実施した。模擬患者からは、何に注目してリフレクションを行うべきかという、リフレクションの遂行にかかる課題について意見が出された。また、同一のシナリオであっても、面接する学生によって、自らの患者役の演技方に変化が生じるなど、事前に十分な役作りをしていても、医学生との面接のなかで臨機応変に変わるために、患者役の演技方の評価は、シナリオと正確に一致するかどうかだけでは困難であるといった、リフレクションにおける自己評価にかかる注意すべき点についての知見も蓄積することができ、「患者役を演じる」という経験についてのリフレクションを行うことの独自性が見出された。

(2) 医学生と模擬患者による医療面接のセッションについて、会話分析の徹視的な手法から分析した。特に学生が言葉に詰まって、模擬患者を前に長く沈黙している状況は、これまで学生が面接を「失敗」している典型的な場面として捉えられてきた。しかし、学生が患者との面接を再開する場面でなされる会話を詳細に分析することから、面接再開に向けて医学生と模擬患者は、あらかじめ設定された医師と患者の役を忠実に演じるだけでなく、実習としての場を維持するためにあえてそれら役割から外れるなど、ロールプレイの場は医学生と模擬患者の状況に応じた相互作用にあることが明らかとなった。そのため、リフレクションを行うのにあたっては、ロールプレイの場面を重層的な観点から検討することが必要になると考えられる。

(3) また、ドラマトゥルギーの観点から、ロールプレイの場を医学生とSPによる「舞台」と想定することで、ロールプレイが有する特性がより明確となった。上記の「失敗」と考えられる場面では、医学生と模擬患者それぞれが医師 患者を演じている「舞台」が不安定なものとなっている。しかし、それは

舞台が成立しなくなっているというよりも、医師 患者が演じられる舞台とは、別の「舞台」に両者が移動することで、その相互作用の維持が試みられていると考えられる。つまり、ロールプレイの場は、さまざまな舞台が重なることから成立していて、相互作用を維持するためには、医学生と模擬患者の両者は事前に設定されたそれぞれの役割を演じることに加えて、舞台間の移動に応じた複数の役割を演じ分ける必要がある。ロールプレイにおいて患者役を演じることは、同時に複数の舞台で役を演じ分けることが織り込まれているという、リフレクションにおいて看過できない一側面が明らかとなった。

(4) 医療面接のロールプレイ後の、学生 模擬患者間あるいは学生間でなされるフィードバックの場面でのやりとりについて会話分析を行った。フィードバックは直前のロールプレイを振り返る点で、リフレクションのプロセスと類似している。フィードバックの内容についてはこれまでも検証を重ねられてきたが、会話分析を通じてフィードバックでの会話が、フィードバックに確保された時間以外の場面で促されるのかを明らかにしたことで、リフレクションといった振り返りや内省には、その場の特性がどのようなものであるのかが深くかかわることが明らかとなった。今後、本成果を応用することで、模擬患者が自らの面接実習での映像記録を視聴して、そこでの経験についてリフレクションを行う、すなわち自身の経験を言語化していくのに、どのような場が適しているのかを継続して検討していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 6 件)

高橋洋一、「模擬患者参加型医療面接実習における『先取的方法』としてのロールプレイ」、「教育と福祉のドラマトゥルギー」シンポジウム、大阪大学人間科学部(大阪府吹田市) 2015年10月31日。

高橋洋一、中野俊也「SP参加型実習における学生間のインフォーマルコミュニケーションの分析」、第47回日本医学教育学会、朱鷺メッセ：新潟コンベンションセンター(新潟県新潟市) 2015年7月24日。

高橋洋一、「インフォームド・コンセントと日本の医療文化」、「いのち」の尊厳を考える研究談話会、台北市(台湾) 2015年1月9日。

高橋洋一、中野俊也「SP参加型実習における『失敗』場面の会話分析」、第46回日本医学教育学会、和歌山県立医科大学(和歌山県和歌山市) 2014年7月18日。

高橋洋一、「医療と人権（倫理）」、「いのち」の尊厳を考える研究談話会、長崎国際大学（長崎県佐世保市）2014年6月14日。

高橋洋一、「相互作用からみた模擬医療面接」、卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム「実践知と教育研究の未来」分科会「人類学的思考と教育のフィールド研究」、京都大学（京都府京都市）2013年3月20日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 洋一（TAKAHASHI, Yoichi）

鳥取大学・医学部・助教

研究者番号：40594271

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：